

2020 年度

国 語
(2 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

日本語を勉強し始めたのは十五歳の頃。ドイツの北の果てに位置する地方都市キール市内の中学校の教室で、大人ばかりのグループに交じり、市民大学が提供する「日本語初級」のクラスに参加した。理由はわりと単純で、子供の時から強い興味を抱いていた日本にいずれ行きたいという夢を持っていたので、その夢がかなった時、日本人と会話するために日本語が必要不可欠だから。言い換えれば、日本語さえできれば日本に行ける気がしていた。

教科書の中にあつたのはバブル時代を意識した八〇年代チックなイラストに、ビジネス会談のために日本を訪れるドイツ人男性のストーリーだった。また、ひらがな・カタカナすら教科書に登場しない初級の授業だったにも関わらず、いきなり「りんごはシュミットさんによって食べられる」と、「受身」用法が口頭で説明されるような、今思えば滅茶苦茶な授業だった。

③ 一九九九年、夏の残暑で息苦しい地方高校の教室の中で、たった一人の「異人」の私は冷や汗をかいていた。十か月の留学で来日したのはいいが、周囲で話されていることは何一つわからない。せっかくなので覚えた「受身」なんて、もちろん何の役にも立たない。そして一番の問題は、ちゃんとした辞書を日本へ持って来なかったこと。関西の県立校に私が持参していたのは旅行者向けの「独日辞書」のポケット版と、同じ手の平サイズの「日英・英日辞書」だけだった。知りたい単語はとにかく載っていないのだ。「自習」、「ラジオ体操」、「校則」、「放課後」、「ゼッケン」など、学校生活の中でしばしば登場する単語が、旅行者向けの辞書に載っているはずがない。

そうすると、唯一頼りになるのは同級生や担任の先生による必死な英語訳と、自分自身の観察力のみ。言葉ではなくて、その場の雰囲気、みんなの反応、声のトーン。担任の先生がホームルームで真剣そうに連発する「ハンソデ」と「ナガソデ」は、どうも知っている単語「制服」に関する話で、おそらく次の日から秋パターンで登校せよ！ という指示だと推測できた。

こうして、ほぼ雰囲気と勝手な想像で日本語を覚えた。時が進み、電子デバイスの恩恵によって知らない単語をすぐに確認できるようになった。これでもうやく効率よく日本語を学習できると思いきや、意外にもそうではなかった。

言葉には様々な種類のものがあり、「牛」や「お箸」のように、具体的なものを指す単語もあれば、気持ちや概念を指す、少しふわっとした単語もある。例えば、「残念」という単語でも、「残念な結果」と「残念な人」でドイツ語訳が違ってくる。しかも後者に関しては「同情に値する人」と **X** 訳すか、「人間失格」と **Y** 訳すかは、状況と話し手によって違うかもしれない。つまり、日本語の「残念」を使用する時に、その表

現が使える「意味の範囲」があつて、それにピッタリ当てはまる、全く同じ範囲のドイツ語がないということ。

単語一つ一つに世界が存在する。まるで生き物のようだ。単語にはその生成過程と成長過程で吸収された地理性、社会性、文化性、時代性が大いに含まれているが、それだけではない。単語はそれぞれ色、響き、サイズといった感覚的な性質を持っている。私たちはそこに凝縮された世界観を借りて、様々なモノを定義し、他人に伝えるためのツールとして利用している。

しかし、「全ての現象を表現するための言葉」は一言語の中に用意されていない。それもあつて、母語のドイツ語には全くない表現が日本語の中にあつたりする。「悔しい」「言霊」(注4)、「意識高い系」(注3)、「女子力」(注3)、「モヤモヤ感」(注3)、「居場所」(注3)、「生きづらさ」(注3)など。もちろん、ドイツ人も悔しがる時はある。しかし、敢えて悲しみとがっかり感の間にあるその感情を表現するための単語を作つてこなかった。つまり、ドイツ人が「悔しがっている」時、自分が「悔しがっている」ことを意識していない可能性があるのだ。

その一方、悔しさを一つの感情として意識しているのに、そのための表現がなければ【モヤモヤ感】が残るだけでなく、とても辛いものがある。日本語のように様々な感情を細かく定義し、表現することが自分の母語のドイツ語でできないため、私は無意識に【生きづらさ】を感じていたと思う。様々な言葉を知ることによつて、目の前の世界も、内面の世界も、言語化し、再構築できるようになった。言語の勉強というのは、テストで点数を稼ぐためのものでもなければ、【意識高い系】が趣味でやるものでもない。母語であつても、外国語であつても、新しい概念を知ること
で世界が少しずつ広くなる効果があると思う。

ちなみに、ドイツ語にも日本語にない表現がある。その一つは「Ferienzeit」。今は「旅行に出かけたい!」、つまり旅心という意味合いで使われることも多いが、本来の意味はホームシックの反対。今の場所は居心地が悪く、当てもなくどこか別の場所に行きたい気分。【居場所】探しの一種かもしれない。私が居場所を日本語の中で見つけたように、そんな居場所を言葉の世界で見つけられたら、素敵だと思う。

(『国語教育相談室』所収コラム マライ・メントライン「言葉には世界がある」より一部改変)

(注1) 電子デバイス：携帯電話やスマートフォン・電子辞書などの電子機器のこと。

(注2) 概念：意味づけられたもの。

(注3) 母語：人が幼少期から自然に身につける言語。

(注4) 言霊：古い時代の日本で考えられてきた、言葉にやどる霊的な力のこと。

問一 — 線①「理由はわりと単純で」とありますが、筆者が中学生の時にわざわざ「日本語」を学びたいと考えたのはなぜですか。理由としてあてはまらないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ドイツの地方都市に比べて都会である、日本にあこがれていたから。
- イ 子供のころから、日本に対して強い興味を抱いていたから。
- ウ 将来、いつか日本に行きたいという夢を持っていたから。
- エ 日本に行った時に日本人と会話するには、日本語が必要だから。
- オ 日本語さえできれば、簡単に日本に行けるような気がしていたから。

問二 — 線②「受身」用法」とありますが、線部が受身用法のものはどれですか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先生が大阪に行かれる。
- イ 学校で先生におこられる。
- ウ 昔の生活がしのばれる。
- エ 旅先で雨に降られる。
- オ これくらいは覚えられる。
- カ 母のことが案じられる。

問三 — 線③「一九九九年、夏の残暑で息苦しい地方高校の教室の中で、たった一人の「異人」の私は冷や汗をかいていた」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「一九九九年」は、元号でいうと何年ですか。例にならって答えなさい。

(例) 一九七〇年…昭和四十五年

(2) 「たった一人の「異人」の私は冷や汗をかいていた」とありますが、それはなぜですか。その理由としてふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本へ来たのは生まれて初めてのことで、気持ちが良いあがり、緊張したため汗が止まらなかったから。
- イ あこがれの日本での留学生活は、思い描いたものとは大きく違い、私をがっかりさせるものだったから。
- ウ ドイツで習ってきた初級クラスの日本語の知識は、実際の日本の生活では役に立たないものだったから。
- エ ドイツから持参した辞書は、あまりにも語数が少なく、高校生活ではほとんど使えないものだったから。
- オ 長い間日本への留学を不安に思っていたが、思っていた通り、日本の留学生活は苦難の連続だったから。
- カ 残暑の厳しい関西地方の気候は、ドイツの北部で生まれた私には、非常に過ごしにくいものだったから。

(3) 「冷や汗をかいていた」状況を乗りこえるために、筆者が頼りにしたものが二つあります。それは何ですか。本文中の言葉を使って、それぞれ七字以内で答えなさい。

問四 — 線④「意外にもそうではなかった」とありますが、「そう」とは何を指しますか。本文中の言葉を使って、三十字以内で答えなさい。

問五 X・Yに入る言葉の組み合わせとしても正しいものはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X「ややほめたたえながら」 Y「かなり見下した感じで」
- イ X「やわらかさを出しながら」 Y「相当がんな感じ」
- ウ X「とてもあわれみながら」 Y「とても耐えられない感じで」
- エ X「非常に情けなく思いながら」 Y「少しは非難した感じで」
- オ X「少し歩み寄りながら」 Y「強く突き放した感じで」

問六 — 線⑤「ドイツ人が「悔しがつている」時、自分が「悔しがつている」ことを意識していない可能性があるのだ」とありますが、筆者はどのようにしてそのように考えたのですか。その理由としてふさわしい部分を、次の空らんにあてはまるように、二十八字でぬき出し、その始めと終わりの三字を答えなさい。

ことを知ったから。

問七 — 線⑥「私は無意識に【生きづらさ】を感じていた」とありますが、なぜですか。その理由を説明しなさい。

問八 本文では【モヤモヤ感】、【生きづらさ】、【意識高い系】など【 】を使った表現があります。何のために【 】が使われているのですか。その理由としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本語が母語ではない筆者が、その言葉の意味をあまり理解しておらず、日本人とは違う意味で用いていることを表すため。
- イ 日本語が母語ではない筆者が、実際に日本語にしかない表現を使うことで、筆者自身の世界が広がっていることを表すため。
- ウ 日本語が母語ではない筆者が、普段^{ふだん}日本語の奥深さ^{おくふか}を理解していない読者に、それぞれの言葉の意味を強調するため。
- エ 日本語が母語ではない筆者が、言葉は新しい時代や社会の中で生まれ、成長していくことを伝えようとしたため。
- オ 日本語が母語ではない筆者が、若者を中心に流行^{はや}る言葉はどの国の言葉であってもすばらしいということを示そうとしたため。

問九 次の文章は清さんと泉さんがこの文章について、話しているものです。 [A] [H] にあてはまるように、それぞれ本文中からぬき出し

て、答えなさい。また * に入るもつともふさわしい言葉を、後のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

清…この文章のテーマは何だろうかね。

泉…筆者は [A] 語が母語なんだね。日本に来て、様々なショックを受けているようね。

清… [B] だけでできれば、日本に来てもだいじょうぶだと安心してたね。

泉…それだけではだめだと気付いた。言葉には様々なものがあるとわかったんだね。大きくは [C] 的なものを指す単語と、 [*] 的な

ものを指す単語がある。

清…さらに、それぞれの単語には [D] 性、 [E] 性、 [F] 性、 [G] 性といったものがふくまれているんだね。

泉…筆者はそれに気がついたんだ。そして新しい概念がひねを知ることによって [H] 効果があると云っている。

清…ということは、この文章では「言葉には世界がある」ということを伝えたいんだね。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ア 形式 | イ 客観 | ウ 論理 | エ 抽象 | オ 表面 |
|------|------|------|------|------|

問十 ――線「辞書」とありますが、特に「国語辞典」においては、「新明解国語辞典」（三省堂）が有名です。その理由は、文章で語の内容を詳

しく説明する方針から、とても独創的な言葉の説明をしていて、「読んで面白い辞書」であるからです。そんな「新明解国語辞典」に関する以下の問題について答えなさい。

(1) 「新明解国語辞典」では、次のようなきまりに従って見出し語を並べています。

1. 五十音順に並べる。

2. 一字目が同じ発音の場合は二字目で、二字目も同じ場合は三字目で決めるというふうには、五十音順に並べる。

3. 濁音（「ば、び、ぶ」など濁点が付く文字）は清音（「は、ひ、ふ」など濁点が付かない文字）よりも後に出てくる。

4. 半濁音（「ば、び、ぶ」など半濁点が付く文字）は濁音（「ば、び、ぶ」など濁点が付く文字）よりも後に出てくる。

(例) 班 ↓ 番 ↓ パン

5. ふつうの「や・ゆ・よ」「つ」は、拗音「や・ゆ・よ」や、促音「っ」などの小さな文字の後になる。

(例) 今日 ↓ 器用

右のきまりに従うと、次の見出し語は、どの順番で並びますか。①～④の語群を、それぞれ並べかえて、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|------|-------|--------|-------|
| ① | ア 鏡 | イ 楽譜 | ウ 科学 | エ 学者 |
| ② | ア 品質 | イ 便せん | ウ ピンポン | エ ビンゴ |
| ③ | ア 流す | イ 泣く | ウ 流れる | エ 泣かす |
| ④ | ア 表 | イ 美容 | ウ 費用 | エ 秒 |

(2) 次の①～⑤の説明は、どの見出し語の説明ですか。それぞれあてはまるものを、後のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 遠浅とちあせの海に住む二枚貝の一種。食べる貝としてもとても普通ふつうで、おいしい。
- ② 浅い海の岩に付く二枚貝。貝殻がらは白い灰色で、長い卵形。肉は美味で、養殖ようしよくされる。
- ③ 川・湖にすむ、アサリよりもずっと小さい二枚貝。食用。
- ④ 近海の海底にすむ巻まき貝。貝殻は厚あつく、げんこつに似て、多くは、とげがある。肉は食用。
- ⑤ エビとカニの中間の形をしている節足動物。巻まき貝の殻の中にすむ。

ア	しじみ	イ	やどかり	ウ	さざえ	エ	かき	オ	はまぐり
---	-----	---	------	---	-----	---	----	---	------

(3) 次の①～③の説明文は、辞書にある見出し語の説明文です。それぞれのようない見出し語の説明文ですか。その見出し語を自分で考えて答えなさい。

- ① アナログ時計の文字盤ばんに向かったときに、一時から五時までの表示のある側。「明」という漢字の「月」が書かれている側。
- ② 捕らえてきた動物を、人工的な環境と規則的な給餌きゅうじ(注…えさを与えること)とにより、野生から遊離ゆうりし、動く標本として一般いっぱんに見せる、啓蒙けいもう(注…人々に知識を与えること)を兼ねた娯楽施設ごらくしせつ。
- ③ 一緒に何かをしたり、遊んだりして、気持ちの通い合っている人。

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

(☆)

— にいさん、これそうだろう。

— どれ。

兄はそばにいる弟のほうをふり向いた。そして、弟の差し出したキノコを見た。しかし、すぐ言った。

— それはちがうよ。こういうんでなくっちゃ。

彼は、自分で今とったばかりのハツタケを、弟に示した。

— ^①これ、だめ!

弟は残り惜し^おそうに、とったキノコをながめていた。

— あ、カサの下にぎざぎざのないのはだめだよ、ヘビダケってね、毒のキノコなんだよ。

彼はまだ十一の少年だけれど、弟に対する時は、^②さすがに兄らしい落ちつきと、いたわりとがあった。

弟が少ししよげているのを見ると、彼は気の毒になった。それでボール・パンのような色をした、ハツタケのあたまを見つけると、すぐに弟に教えてやった。

— 真ちゃん、そこにあるよ。

弟はそれを聞くと、元気づいてそこらを見まわした。しかし、しら茶けた落ち葉のほかには、なんにも目にはいるものはなかった。兄はかさね

て言った。

— そら、そこにさ。真ちゃんの足もとんとところに。

— どこに。

— これさ。

と、兄は弟のそばに寄ってきて指さした。

— 葉っぱでわからないんだもの。これ？

弟は落ち葉を払いのけて言った。

――あ。

――毒ダケじゃない？

――ううん、これがほんとのハツタケだよ。

――ぼく、とつてもいい。

――いいとも。

弟はかがんでハツタケを抜いた。しかし、無気味な虫でもつかんだ時のように、あわててキノコを放してしまった。

――なんだって捨てつちまうの、真ちゃん。

兄はなじるように言った。

――だって、こわいんだもの。

――何がさ？

弟はうつむいたまま黙っていた。

兄のくちびるには、微笑が浮かんできた。

――ああ、キノコの色が変わったんで、驚いたんだね。なあに、そりゃ、なんでもないんだよ。ハツタケは、さわるとすぐ色が変わるんだよ。

――じゃ、大丈夫？

――大丈夫さ。

弟は、やっと安心したというふうであった。

――もつたいない。こんなかへ入れときよ。

兄はザルの代わりに、地上に裏がえしにして置いてある、自分の帽子をさした。弟は拾って、その中へ入れた。それから、ついでに、兄がとつた、帽子の中のキノコの数を、数えてみた。

そのあいだに、兄は落ち葉をかさつかせながら、あっちこっちハツタケをあさっていた。兄が、目をきよろきよろさせているようすは、ちょう

ど、朝、おばあさんが背なかを丸くして、ふとんの上で、ノミを追いかける格好とよく似ていた。弟はそれを見ると、わけもなく、X 気もちになつてきた。そして、自分もまたすぐに背なかと目だまをまあるくして、タケ狩り（キノコ狩り）をやりだした。もちろん、弟は兄の四半分もとれなかつたけれど、マツ林の中をはねまわつて歩くことは、なんとと言っても、彼には Y でたまらなかつた。



突然、ドシーンという響きがした。兄はふいと目をあげると、一間ばかり先の、少し傾斜になつてゐる地面の上を、弟はころころところがつてゐた。おそらく、木の根か何かにつまずいたのだらう。はずみをくらつて、ころがりだしたものらしい。それを見ると、兄は思わずふきだしてしまつた。弟が目の前で倒れたのだから、すぐにも駆けて行つて、起こしてやるのが当然なのだが、その瞬間には、「弟」とか、「起こす」とかいう考えは、まるでなかつた。それどころか、手を打つて、はやしたてたいような気もちでいっぱいだった。しかし、次の瞬間には、もう弟のそばにいた。そして、木の根かたでとまつた、弟のからだを引き起こした。

その時の彼は、いたわりぶかい兄であつた。彼は心配にふるえながら、弟を介抱した。ところが、6 弟は起きあがると、兄の顔を見るなり、にやりと笑つた。すると兄の顔もまた、ひとりではほえんでしまつた。泣きだすと思つた弟が笑つたものだから、兄は急に気が軽くなつた。

弟は起きあがるとすぐに、笑えたくらいだから、どこもけがはしてゐなかつた。しかし、彼の笑いは妙ちきりんな笑いだつた。もちろん、しくじりをやつたあとの、てれかくし笑いに相違ないのだが、それにしても、どこかへんところがあつた。よく見ると、それは弟の右のほつぺたに、7 したたか、どろがついてゐたからだつた。おそらく、倒れた時にくつついたものだらう。兄はそれを知ると、すぐに指でどろを落としてやつた。けれども、よく落ちないので、注2 筒そでの中に手を引つこめて、それでほつぺたをこすつてやつた。ところが、それでも、すっかりきれいにならないものだから、今度は彼は、筒そでの先につばをくつつけて、丁寧ていねいにふいてやつた。そのあいだ、弟はおとなしくして、兄のやつてくれるままになつてゐた。

それから、ふたりはまたタケ狩りをやりだした。

しばらくしてから、兄はハツタケでいっぱいになつてゐる帽子を取りあげて、得意そうに言つた。

——真ちゃん、こんなにとつたよ。

その時、突然^{とつぜん}うしろで大きな声が出た。

——やい、それを持つてくことはならねえぞ。

ふたりはびっくりして、その声のほうを見た。うしろに、山ばんのじいさん^(注3)が立っていた。彼は待ち構えていたと言わぬばかりに、ふり向いた少年の手から、キノコのはいつている帽子を取りあげた。そして、いきなり兄の横つつらを一つ、なぐりつけた。

——ふてえ（ずうずうしい）野郎だ。

しかし、年うえの少年は泣かなかった。顔をまっかにして、首をうなだれているだけだった。ところが、弟のほうは、自分がなぐられたのではないのに、急にワアッと泣きだしてしまった。

山ばんは、少年らが無断でハツタケ山を荒らしたことを、なお、くどくどとおこった。

——またはいつてくると、承知^{まうち}しねえぞ。

そう言つて、ふたりにマツ林のそとに追い立てた。そこまで来ると、じいさんは帽子の中のハツタケを、自分のザルの中にあけて、からになつた入れ物を、少年にたたきつけたなり、行つてしまった。

弟は、なおしくしく泣いていたが、ここで、芝^{しば}の上に落ちてゐる兄の帽子を拾つた。そして、それを兄に手わたそうとした。すると兄は、帽子を受け取らずに、いきなり、弟の横つつらをなぐりつけた。

兄がなんでそんなことをしたのか、彼自身にもよくわからなかつた。もちろん、じいさんになぐられたので、その腹いせに弟をなぐつたのではない。なんだか知らないが、年したの者なぞから親切に帽子を拾つてもらつたことが、兄にはたまらなかつたのではないだろうか。

弟は不意になぐられたので、前よりも激しく泣きだした。と、その声につれて、今まで泣かず^⑨にいた兄も、弟をなぐつておきながら、また、ワアッと泣きだしてしまつた。

それから、ふたりは長いこと泣いていた。はじめは、声を立てて泣いていたけれど、しまいには、機械的に涙が出るだけだつた。そして、あつたかい水たまが、ひっきりなしに流れているうちに、ふたりのほつぺたは、何か柔^{やわ}らかいものになでられてゐるような気がしてきた。

弟はちいさい声で言つた。

——にいさん、勘弁^{かんべん}してね。

—うん。

兄はただ「うん。」と言っただけだった。声はうるんでいるが、明るい響きを持っていた。

やがて兄は、どろだらけになって帽子を拾って、ひざの上で、五、六度たたいた。彼はそれをかぶらないで、かた手に持ったまま、別の手で弟の手をとった。そして、うちのほうへ歩きだした。しかし、ふたりは道みち思いだしたように、なお、泣きじやくっていた。

(山本有三『兄弟』より一部改変)

(注1) 四半分…4分の1

(注2) 筒つづそで…たもとがなく、筒のような形をしたそで。仕事着。子供の着物などに用いる。

(注3) 山ばん…山林の番人。

問一 — 線①「これ、だめ！」は兄弟どちらのことですか。答えなさい。

問二 — 線②「さすがに兄らしい落ちつきと、いたわりとがあった」とありますが、「兄らしい落ちつきと、いたわり」とはどのような様子をさしていますか。(☆) (★) の部分から具体的に説明しなさい。

問三 — 線③「無気味」の「無」と同じ発音をする接頭語が付くのはどれですか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 必要

イ 器用

ウ 公式

エ 用心

オ 意味

問四 ———線④「なじるように」、————線⑦「したたか」とはどういう意味ですか。次の中からふさわしいものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

④「なじるように」ア 責めるように

イ 問いかけるように

ウ 不平を言うように

エ なすりつけるように

オ しっかりつけるように

⑦「したたか」

ア ひどく

イ わずかに

ウ きたなく

エ 不意に

オ おもおもしろく

問五

X	Y
---	---

に入る言葉は何ですか。その組み合わせとしてふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア X たのしい ——— Y 苦痛

イ X うれしい ——— Y 愉快ゆかい

ウ X なつかしい ——— Y 幸福

エ X さびしい ——— Y 不安

オ X せつない ——— Y 新鮮しんせん

問六 — 線⑤「弟はころころとろがっていた」とありますが、それを見た瞬間しとかんの兄はどんな心情になりましたか。本文から十五字以上二十字以内でぬき出し、その始めと終わりの三字を答えなさい。

問七 — 線⑥「弟は起きあがると、兄の顔を見るなり、にやりと笑った」とありますが、それはなぜですか。次の中からふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 転んで失敗したはずかしさを隠したかったから。

イ 兄からバカにされることを不安に思ったから。

ウ 転んだ時の恐ろしさを思い出したから。

エ けがが見つかり帰ることになるのがいやだったから。

オ 兄を心配させてはいけなと思ったから。

カ 兄が心配しているのを見て、いい気味だと思ったから。

問八 — 線⑧「いきなり兄の横つつらを一つ、なぐりつけた」とありますが、なぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハツタケをたくさん取って、得意になっている二人が許せなかったから。

イ 年上の自分に対して、失礼な態度をとる二人に腹が立ったから。

ウ 大人の自分よりも、たくさんハツタケを子供に取られてくやしかったから。

エ 自分が大切に管理している山に、二人が無断で入り、荒らしたから。

オ さんざん怒おこられているにも関わらず、二人はだまっているだけだったから。

問九 — 線⑨「いきなり、弟の横つらをなぐりつけた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次の文章に当てはまるように、説明しなさい。

弟が ことで、兄は弟から と思い、 から。

問十 — 線⑩「ふたりのほったたは、何か柔らかいものになでられているような気がしてきた」とありますが、どういうことを表していますか。説明しなさい。

問十一 この小説の表現の説明として、もっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「兄」と「弟」の会話を短くかつテンポよく描くことにより、兄弟の心の距離が縮まっていることを表している。
- イ 「山さんのじいさん」のあらあらしい口調をくり返すことで、年長者を怒らせた時のこわさを明確に表している。
- ウ 「兄」がなぐられたのをただ泣いて見ているだけだった「弟」を詳しく描くことで、年下の無力さを表している。
- エ 兄弟の笑い合っているすがたを中心として描くことで、登場人物の感情の移り変わりを分かりやすく表している。
- オ 「兄」が「弟」を世話する場面を多く取り入れることにより、「兄」が心のやさしい性格であることを表している。

問十二 この小説の作者である山本有三の作品はどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 走れメロス
- イ 注文の多い料理店
- ウ 路傍の石
- エ 伊豆の踊子
- オ 吾輩は猫である

〔三〕

次の——線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① これはとても役に立たないシロモノだ。
- ② メガシラを熱くする。
- ③ 食後にフクヤクする。
- ④ コクモツを生産する。
- ⑤ 政治に参画する。
- ⑥ 彼は真似るのが上手だ。

